
愛死天流！

藍那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛死天流！

【Nコード】

N0675B

【作者名】

藍那

【あらすじ】

俺は達樹領——たつきりょう——！中学三年生にもなつて、後輩にまで命令される身分。そんな弱い自分を変えるため、俺は学校内にいる不良グループに入ろうと決意！初めはボコボコにされたものの、いろいろあって何とか入団。が……この不良グループは俺の憧れとは全く違う、ふざけた集団だった。

ブローグ

あゝあ。俺、何やってんだろう――。

制服は泥まみれ、靴は片方なし、体中はズキズキと痛む。

そんな悲惨な状況で、今にも泣き出しそうなほどビビっている俺は、達樹 領――たつき りょう――。

何故こんなにも惨めかって？ それは、目の前にいる奴らを見れば理解できる。

今時ちよつと珍しいリーゼントで、隅から隅まで金色に染められたその髪は、どう見ても不良。

実はこの集団に入ろうと、俺は中学になって一番頑張った。

勿論バカにされて、この通りボコボコにされたわけだが、諦めてはいない。

絶対に俺は不良グループに入ってやる、と心に決めていたから。絶対に引き下がるわけにはいかない。

口元を流れる真っ赤な血液を、自分の制服の袖で拭くと、俺はまた立ち上がり、一言言った。

「俺も……入れて、くれ」

こんなにも不良グループに入りたい理由は、この放課後という時

間から少しさかのぼったところにあった。

いつものように、購買で昼食のパンを買っていた時、見事なまでに俺は財布を盗まれた。目の前にいる不良グループに、だ。

あの鮮やかな盗みは、盗られた悔しさなどよりもただ単に凄いと
いう感想しか出てこなかった。

——格好いい。

結構前から、俺は不良を見るたびに憧れたりもした。

「お願いします！！俺も、入れてください！！この通りです！」

土下座をする俺の前に、不良グループのリーダーであるリーゼン
ト頭が、一言言う。

「……入りたいって言っても、お前みたいな弱っちーやつはいらね
ーんだよ。さっさとくたばっちまえこのクソがっ！」

ドスっというような音がして、また俺の腹部を強烈な痛みが襲う。
そして、俺の視界から全てのものが消えた——。

*

「リーダー、なんかあいつおかしなやつでしたねえ？」
「全くだぜ。こん中でまともな不良は——俺様ただ一人なのによ」
「あの方は我々の『戦い』を知らないみたいですから、憧れというものを失うことになるでしょうねえ」
「ああ——。まっ、これ以上俺たちに仲間が必要ねーしな」

*

不良たちがぼやいていることなど知らず、俺は結構長い間気絶していた。

気がつくともう真っ暗で、体育館裏で倒れている俺以外、人という生物の気配はなかった。

やっぱり、俺みたいな貧弱なやつは不良になれないのかなあ……。少しばかり、俺は自分のことがイヤになった。

俺がここまで不良に入りたいのは、ただ単に強くなりたいと思っただからだ。

中学に入って三年も経つのに、俺は今まで先輩や同じクラスのものだけじゃなく、後輩にまでバカにされて命令までされる身だった。もうそんな馬鹿げた人生は嫌になり、とにかくあの不良グループに入って、今まで俺をバカにしてきたやるを見返してやりたい！

——が。人生そんなに甘くはなかったらしい。
結局俺は、痛む腹を手で押さえながら家路についた。

しかし、次の日に起こる自分の転機を、この時俺は予想もしていなかった。

プロローグ（後書き）

初投稿の学園コメディーです。楽しんでいただけたら嬉しいです。

第一話 俺の夢は地位向上

家に帰った俺を待っていたのは、説教という名のつらぁい地獄だった。

人一倍心配性である母さんは、わざわざ玄関前で俺を待っていて、顔を見た途端に大声で怒鳴り始めた。

「あんたって子は本当にどうしてこうなの！？　少しはお姉ちゃんや妹を見習いなさいよ！」

散々怒鳴り散らして、今度は俺の二人の姉さんと妹のいいところを言い始めた。

確かに俺は、他の二人と比べてできが悪い。頭も悪けりや運動神経もゼロで、誰にも腰が低くてとても頼りない。家でもみんなに怒鳴られて、情けないの連発。

どうして俺はこうなんだろう。自分が嫌になってしまっわけが、毎日分かってしまう。

「……はぁ。まあ続きは後ね。とりあえず、さっさとご飯食べちゃいなさい」

キッチンに入った俺は、壁にある時計を見て絶句した。

今現在の時間は、七時十五分。部活をやっていない俺は、大抵四時頃には帰宅する。母さんが怒鳴るのも無理はないだろう。

四月の中旬でも、さすがにこの時間には暗くなってしまう。何故気がつかなかったのだろう。

「あゝ腹減った。いただきます……」

少し惨めな気分で、俺は用意された夕食を食べる。するとすかさず、エビフライを奪いに来る者がいるのだ。

「……おい麗華——れいか——、隠れてるのバレバレだぞ？」

机の下に気配を感じて、俺は小さな声でボソリと呟いた。と、同時にスルリと手が伸びてきて、俺の皿からまんまとエビフライを頂戴した。

「へっへっへっ！！ りょうちゃんは弱いから、エビフライすぐ取れるんだよねえっ」

——くそったれ。

小学二年生の妹にここまで茶化されて、黙っているような人間はいない。

俺は勢い良く椅子から離れ、たった一つしかないエビフライを取り返すために、麗華めがけて突進した。

「お前なあゝ！！ 少しは自分の兄貴を敬えええええええええええええええ！！」

ゴン。

勢いよく突進したのも虚しく、麗華は即座に身をかわしてみせた。

おかげで俺は、向かいの机の脚に思い切り頭をぶつけてしまい、
とんでもなく痛い思いをした。本当に許せない。

「……ったく、もういいよ。食いたきゃ食べよ。バカらしいったら
ありやしねえゝ!!」

ガツガツをやけ食いをした俺は、さっさとキッチンを後にした。
胸の当たりがムカムカしくる。

こうなったら、明日もう一度あの不良グループに頼むしかない。
あのグループに入り、自分の地位向上を、絶対に成し遂げてみせる
!!

第二話 発見！リーゼントの靴

雄鶏も鳴かないうちに、俺は目を覚ましてしまった。

早く学校に行きたくて、寝てなどいられなかったんだろう。いつもなら熟睡して夢もたくさん見るのに、今回はどんな夢だったかさっぱり分らない。

とりあえず学校に行く準備や着替えは済ましたが、朝食が……。
「あゝ腹減ったなあ……。餓死寸前って、こういうことなのか？」

靴を持つて階段を下りてみたが、やはり電気はついておらず、人が起きているようには思えなかった。

今はちょうど五時半をまわったところ。俺の家族は、六時になって初めて母さんが起きるから、この時間帯だと全員熟睡してることだろう。

でも俺はそういうわけには行かない。早く学校に行つて、あいつらを待ち伏せしておいて、仲間に入れてもらうんだ！

キッチン内もやはり暗くて、俺は慌てて電気をつけた。

ラッキーなことに、机の上には昨日の晩御飯の残り物があった。

——レタスときゅうりを添えただけの、虚しいサラダだけだが……。

「まあ、ないよりはましかな？ えーい！ こうなったらサラダで十分だっ！」

俺の不良魂を見せてやるぜ！と、言つたところで誰も格好いいなんて思ってくれないだろうけど、俺は心の中で孤独に叫ぶ。

そして次の瞬間には、口いっぱいレタスときゅうりを詰め込ん

だ。

*

寒い。

家を出て、まず最初に俺はそう思った。とても率直な感想だ。
しかし現実とは厳しいもので、俺は春を侮ってはいけないと改めて思った。

「くそぉー！　なんで俺はこんな目ばかり遭うんだよぉ……怨むぞ、母さん」

人気もなく車の通りも少ない学校への道は、いつも以上に寂しい環境に思えた。

野良猫の一匹すらいなし、玄関前を掃除しているいつもの主婦たちの姿だっでありやしない。これが人の住むところなのだろうか、とさえ思ってしまった。

俺の家から学校までは、そんなに遠いわけではないのだが、この寒さの中だと何千里も歩いたような気分だ。

「ああ、マルコ。お前はこんな気持ちだったんだな……三千里、遠い」

朝から馬鹿げた発言をしたということにも気づかず、俺はただ寒い道のりを進んでいった。

学校につく頃には、近くの家々にも電気は灯り、ある程度賑やかな環境が戻りつつあった。

朝は孤独な気分になるな、と思いながら俺は足早に校門を通った。

「あいつら、ちゃんと玄関から来るのか？　もしかすると……窓から直接教室に入ったりするのca!？」

真剣に悩むことでもないのだが、俺はとにかく焦った。こうしている間に、不審人物と思われないだろうか、と思ってしまう。

そもそもあの不良グループは、朝は早いのだろうか？

もしかすると、遅刻してるにも関わらず平気で教室にズカズカと入っていつて椅子にドシン。そんな毎日を送っているんじゃないか。

考えるより早く、俺の足は靴箱の前まで進んでいた。まあ、思った通り上履きしかない——じゃなくて、五つほど下穿きが置かれていた。三年生のところだけではない。

「この靴まさか……あつ、『篠星　竜輝——しのぼし　りゅうぎ——』って書いてあるじゃん」

その篠星　竜輝こそが、あの不良グループのリーダー、俺いわくゴールドリーゼントの名前だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0675b/>

愛死天流！

2010年10月8日21時18分発行